

発行

千葉県立中央博物館
房総の山のフィールド・ミュージアム

連絡先

〒260-8682
千葉市中央区青葉町955-2
TEL:043-265-3111

[http://www.chiba-muse.or.jp/
NATURAL/special/yama/](http://www.chiba-muse.or.jp/NATURAL/special/yama/)

2021(令和3)年6月発行

2021・夏

73

特集

カミキリムシの魅力



写真
ミツバツツジ花上で花粉を食べるミヤマリリハナカミキリ。体長は8ミリほどの早春にのみ見られる小さなハナカミキリ(2021年3月26日旧君津市立三島小学校近くにて)。

「カミキリムシ」というと、キボシカミキリとゴマダラカミキリを連想される方が多いようです。前者はクワの木、後者は果樹や街路樹を枯らす憎いヤツ、のようにどうやら嫌われ者のようです。

カミキリムシ科の甲虫は日本に八百種近くが生息します。大きさも三ミリほどの小さな種から、五センチほどもある大型の種もあり、色も形もとても多様な昆虫です。幼虫は「テッポウムシ」と呼ばれ、木の中でトンネルを作りながら材を食べます(次頁写真①)。冒頭の二種のカミキリのように、幼虫が生きた木を食べる場合は木を枯らしてしまうことがあるので害虫とされますが、ほとんどの種は枯れた木を食べて育つので、枯木を土に戻すのを助ける益虫ともいえます。ちなみに、漢字では「髪切り虫」で、髪も切り落とすような鋭い大顎を持つことに由来します。英名は、“longhorn beetle”で、角の長い甲虫の意味です。この特集では知られざるカミキリムシの魅力についてご紹介します。

(斉藤明子)

房総の山のフィールド・ミュージアムとは

房総の山を舞台に、地域の自然や文化そのものを「資料」や「展示物」としてとらえる、千葉県立中央博物館によるフィールド事業の一環です。観察会を開催したり、旧君津市立三島小学校の校舎を利用した「教室博物館」を拠点として、地域の方々のご協力をいただきながら、資料の収集や調査・研究等の活動を行っています。

『教室博日記』の紹介

房総の山のフィールド・ミュージアムのウェブサイトには『教室博日記』というコーナーがあります。学芸員が房総の山を歩き回って見つけた生き物や地形・地質や歴史・民俗などを写真と文章で紹介しています。毎月、数本から十数本の記事を追加していますので、ぜひ、のぞいてみてください。



教室博日記のQRコード

QRコードから「房総の山のフィールド・ミュージアム」のサイトに入り、「更新情報」にある「教室博日記」をクリックすると目次ページ(画像)が開きます。あるいは、http://www.chiba-muse.or.jp/NATURAL/special/yama/news/news_index.htm を開いてください。

(尾崎輝雄)

教室博日記の目次ページ



連載

小櫃川流域の生きもの

キセキレイ ~羽はヨレヨレ~

写真1: 水浴びするキセキレイ
2021.2.10 木更津市



写真2: 鬼瓦の上でさえずるキセキレイのオス
2018.4.2 木更津市

真冬の晴天の公園、「小鳥が水浴び!」と驚きました。尾が長く、胸からお腹が黄色、キセキレイです。しかし、水にぬれ、羽がヨレヨレです。岸辺の石畳から芝生の上を歩いていき、体をブルブルと振るって水を落としています。「真冬なのに、なぜ、水浴び?」と不思議に思いました。鳥は、水を浴びて、羽毛についた汚れや老廃物を取り除き、外部寄生虫を駆除し、羽毛の保温効果やつばさのはたらきを正常な状態に保つ必要があるからです。水浴びは、脚のたつ浅い水辺や水たまりで頭や体、つばさや尾を水につけながら、激しく震わせて行います。

さて、この公園と隣接する小櫃川では、セキレイ科の小鳥はハクセキレイとセグロセキレイが繁殖しています。キセキレイは、上流の支流の七曲川では繁殖していますが、ここでは、毎年、冬に1羽見かけるだけで、繁殖した様子はありません。この流域の上流で育ったキセキレイが冬は流域の平地に降りてきて生活するのです。

MEMO キセキレイ
全長約20cm スズメ目セキレイ科

千葉県では房総丘陵の溪流付近で繁殖する。越冬期は各地の湿地で見られる。川岸や水路などの水辺を活発に歩き、昆虫やクモを捕らえる。石垣、人家の屋根の隙間、溪流の崖のへこみなどに巣をつくる。

うか? そうとも言えないようで、北方で繁殖したキセキレイが、越冬のために、温暖な房総の平地に次々と渡ってきて、南方に去っていくのかもしれない。移動経路は足環をつけないとわかりません。いずれにしても、千葉県内では、繁殖するキセキレイが激減し、千葉県指定の重要保護生物になっていますが、鮮やかな黄色が目立つ清らかな小鳥なので、今後も流域で繁殖が続くのを期待しています。

参考文献 樋口広芳1979「バードウォッチング」pp122-126平凡社
千葉県の保護上重要な野生生物千葉県レッドリスト~動物編
2019年改訂版千葉県環境生活部自然保護課
千葉県の保護上重要な野生生物千葉県レッドデータブック~動物編2011年改訂版千葉県
(文・写真 千葉県立中央博物館ボランティア 成田篤彦)

しいむじなの由来



房総の山のフィールド・ミュージアムのニュースレターのタイトル「しいむじな」は、アナグマをさす房総丘陵の方言です。ムジナは地域によってアナグマやタヌキをさすなど様々なのですが、千葉県内ではアナグマのことが多いようです。房総丘陵の人々は、大きなスタジイの木のウロに棲んでいるムジナを、愛情を込めて「しいむじな」と呼んでいます。

編集後記

カミキリムシにしてもコケにしても、環境によって見られる種が異なる点は共通な点ですね。調査研究が進めば、これまで見過ごされてきた特殊な環境にも、多様な生物が暮らしていることが明らかになるかもしれません。楽しみます。

令和3年度は、房総の山のフィールド・ミュージアムの新メンバーとして、千葉友樹(古生態学・堆積学)が加わりました。よろしくお願いたします。
(千葉友樹)

今から約60年前の1962年に鋸山からアツバサイハイゴケが見つかり(写真1)、「えっ!、千葉県に?」、「何かの間違いだらう」と驚かれました。アツバサイハイゴケは、埼玉秩父山地にある鍾乳洞周辺の石灰岩地に知られていたため、「石灰岩がない鋸山に生えているはずがない」と思われたのです。さらに、その約30年後の1989年には、鋸山から再び石灰岩を好むヒナゼニゴケが見つかった



写真1 アツバサイハイゴケ(鋸山、鋸南町)



写真2 フガゴケ(鋸山、鋸南町)



写真3 ダンダンゴケ。白く見えているのがトウファ。(清澄山、君津市)



写真4 ニセイシバイゴケ(清澄山、君津市)

コケ植物(蘚苔類ともいう)は、生育地の環境にとっても敏感な植物です。温度や湿度、日当たりはもちろんですが、土や岩の性質にも敏感です。例えば、ゼニゴケは弱アルカリ性を好むため、コンクリートが多い街中や土壌改良された畑、花壇などに生えています。また、ミズゴケの仲間、酸性水域を好み、高山の湿地などに生えています。このようにコケ植物は、気候だけでなく、土や岩、樹幹などの性質によって生えている種類が異なり、生えている種類は生育地の性質をあらわしています。房総丘陵に生えているコケ植物は、関東ローム層や泥岩、砂岩を好む種類がほとんどです。ところが、

今から約60年前の1962年に鋸山からアツバサイハイゴケが見つかり(写真1)、「えっ!、千葉県に?」、「何かの間違いだらう」と驚かれました。アツバサイハイゴケは、埼玉秩父山地にある鍾乳洞周辺の石灰岩地に知られていたため、「石灰岩がない鋸山に生えているはずがない」と思われたのです。さらに、その約30年後の1989年には、鋸山から再び石灰岩を好むヒナゼニゴケが見つかった

今から約60年前の1962年に鋸山からアツバサイハイゴケが見つかり(写真1)、「えっ!、千葉県に?」、「何かの間違いだらう」と驚かれました。アツバサイハイゴケは、埼玉秩父山地にある鍾乳洞周辺の石灰岩地に知られていたため、「石灰岩がない鋸山に生えているはずがない」と思われたのです。さらに、その約30年後の1989年には、鋸山から再び石灰岩を好むヒナゼニゴケが見つかった

今から約60年前の1962年に鋸山からアツバサイハイゴケが見つかり(写真1)、「えっ!、千葉県に?」、「何かの間違いだらう」と驚かれました。アツバサイハイゴケは、埼玉秩父山地にある鍾乳洞周辺の石灰岩地に知られていたため、「石灰岩がない鋸山に生えているはずがない」と思われたのです。さらに、その約30年後の1989年には、鋸山から再び石灰岩を好むヒナゼニゴケが見つかった

房総丘陵は石灰岩を好むコケの宝庫?!

コラム

房総丘陵の動植物(21)

今から約60年前の1962年に鋸山からアツバサイハイゴケが見つかり(写真1)、「えっ!、千葉県に?」、「何かの間違いだらう」と驚かれました。アツバサイハイゴケは、埼玉秩父山地にある鍾乳洞周辺の石灰岩地に知られていたため、「石灰岩がない鋸山に生えているはずがない」と思われたのです。さらに、その約30年後の1989年には、鋸山から再び石灰岩を好むヒナゼニゴケが見つかった

今から約60年前の1962年に鋸山からアツバサイハイゴケが見つかり(写真1)、「えっ!、千葉県に?」、「何かの間違いだらう」と驚かれました。アツバサイハイゴケは、埼玉秩父山地にある鍾乳洞周辺の石灰岩地に知られていたため、「石灰岩がない鋸山に生えているはずがない」と思われたのです。さらに、その約30年後の1989年には、鋸山から再び石灰岩を好むヒナゼニゴケが見つかった

今から約60年前の1962年に鋸山からアツバサイハイゴケが見つかり(写真1)、「えっ!、千葉県に?」、「何かの間違いだらう」と驚かれました。アツバサイハイゴケは、埼玉秩父山地にある鍾乳洞周辺の石灰岩地に知られていたため、「石灰岩がない鋸山に生えているはずがない」と思われたのです。さらに、その約30年後の1989年には、鋸山から再び石灰岩を好むヒナゼニゴケが見つかった

特集

カミキリムシの魅力

カミキリムシの成虫の暮らし方は様々です。花を訪れて花粉を食べるハナカミキリ類(表紙写真)、枯れ木で見つかるトラカミキリ(写真2)やフトカミキリ類、腐朽の進んだ倒木に発生するノコギリカミキリ類(写真3)、中には後翅が退化して飛べないコブヤハズカミキリ(写真4)などもあります(千葉県には生息していません)。

千葉県に生息するカミキリムシは約二百種、この中にはまだ一匹しか見つからない珍しい種も含まれます。幼虫が食材性であることから、森林のある房総丘陵に多くの種類が生息しています。モミを食樹とするオオトラカミキリ(写真5)やヒゲナガカミキリ、春に白い花に集まるトサヒメハナカミキリ(写真6)などが、千葉県では房総丘陵のみで見られる代表的なカミキリムシと言えるでしょう。これらの種は、他県では標高の高い山地に生息していますが、標高百〜三百メートル程の低い山に生息していることが千葉県ならではの特徴です。

近くに森があれば、カミキリムシを探しに出掛けてみましょう。早春に咲くカエデの花を長竿の網で掬うと、小型のハナカミキリやトラカミキリなどが入ります。その後は、カマツカ、ガマズミ、コゴメウツギ、ミズ



写真1 ムネモンアカネトラカミキリ(鴨川市)



写真2 モミ伐採木樹皮下のヒゲナガカミキリ幼虫(君津市)



写真3 コブヤハズカミキリ(山形県鶴岡市)



写真4 ウスバカミキリ(千葉市)



写真5 オオトラカミキリ幼虫食害痕(君津市)



写真6 トサヒメハナカミキリ(鴨川市)

キ、クリなどの白い小さな花が狙い目です。このようにカミキリムシの一部の種類は花粉を食べるに花に集まり、花上が雄と雌の出逢いの場となります。花の種類と日なたか日陰かによって集まるカミキリムシの種類が微妙に違うので、較べてみるのも面白く思います。ただし、午後になると花に来なくなるので、見られるのは晴れた日の午前中に限られます。春から夏にかけては、枯れ枝や伐採木、立ち枯れ木を探すと、フトカミキリ類やトラカミキリ類(写真2)が

見つかります。地味な色のカミキリムシは樹皮にそっくりなので、目をこらしてじっくり探す必要があります。見つからなかったら、枯れ枝の下に網を受けて、上から叩いてみると落ちてくる場合があります。また夜間、クヌギなどの樹液に、カプトムシなどと一緒にミヤマカミキリなどが来ているかもしれません。八月も後半になるとカミキリムシはめっきり減ってしましますが、先に紹介したオオトラカミキリはこの時期に限って現れます。この種の幼

虫は、生きたモミの材中でトンネルを作りながら食い進みます。蛹化前に掘り進めるので、樹皮に特徴的な痕が残ります(写真7)。八月頃に成虫が木の中で羽化し、樹皮に穴を空けて外へ出ます。モミに渦巻きを見つけて、新しいような穴があれば、オオトラカミキリが発生している証です。私は、毎年夏になると、この憧れのカミキリを求めて山の中でモミの木を見上げるのですが、実は未だに見つけられていません。(斉藤明子)